
ジハード

みかど

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジハード

【Nコード】

N2888W

【作者名】

みかど

【あらすじ】

この世界を闇に覆わんとした魔王が居た。だが勇者は見事魔王を討ち倒す・・・そして囚われの幼い少女を見つけた。言葉を失った少女は王国の養女となり、心に密かな決意を抱く。王子と姫の恋物語では全く無いのでご注意を。

序章

周囲四方を囲む石壁に継ぎ目は無く、一枚の石で造り上げられている。傷の一つも無い。

堅固にして重厚な広間は痺れそうな緊張感と魔力の余波に包まれていた。

「滅びるがいいっ!!」

叫びと共に振り下ろされた剣から雷光が迸る。

目を覆う光の奔流とそれを？み込まんとする虚無の闇がぶつかり合った。

うづるうるぐ・・・う・・・!!

地獄の底から響くような呻き声が聞こえ、剣を握る男に闇が迫る。

「闇、などに・・・闇などに、人は負けぬ・・・っ!!」

振り下ろしていた剣を再び天に掲げ、呪語を紡ぐ。

彼を剣を芯として、ぼんやりとした光があふれ・・・それはやがて目を覆わんばかりの輝きとなった。

輝きは苛烈な光の刃となり闇を切り裂いていく。

やがて静けさと少しばかりの薄暗さを取り戻したその広間に立っていたのは剣を掲げた男。

そして。

零れ落ちそうに目を見開き、太い柱にしがみつく幼い少女だった。

.....
.....* * * * *

わぁあと地響きせんばかりの歓声が彼等を包む。

街の大通りを馬に乗って行進しているのは、魔王討伐を果たした勇者の一行だった。

「イルシオン殿下万歳！！」

「我らが帝国に栄光あれ！」

先頭に行くのはこの国の皇太子であり、最大の功労者でもある。

長い旅路と戦いの激しさを思わせるくたびれた外套を纏っていても、光の勇者と称えられたその姿は万人が平伏さずにはいられない覇気に満ちていた。

その王子の腕の中には大衆の歓声の声も聞こえないように無表情で前を向く幼い少女が座っている。

王子は観衆の声に穏やかに笑顔を返しながら、出来るだけ馬が揺れないようにと気を遣いながら王城の門を潜った。

「お帰りなさいませっ！殿下！！」

「よくぞお戻り下さいました!!」

「さあさあ陛下がお待ちです!」

馬から下りるや方々から声が掛けられる。

「わかった。…すまぬが誰かこの子供をアニーのところへ連れて行
つてくれぬか?」

「・・・子供?」

見れば王子の足元にフードを被った小柄な人物が立っている。

「ああ。魔王の城に囚われていたのだ」

「つ何と!!」

「心に傷を負っているようで言葉がしゃべれぬ」

「何と憐れな・・・畏まりました。殿下、私が責任を持ってアニー
のところへお連れいたしましょう」

初老の男は頷き、子供と目線を合わせるようにしゃがんだ。

「子供よ。殿下は大変お忙しい身、代わりに私がお前をアニーとい
う者のところへ案内する。なあに心配はいらぬ。アニーというのは
殿下の乳母もしておった者ゆえな」

子供は依然として何の反応も無いが、初老の男はお構いなしだ。

「それでは殿下、この子供は私にお任せ下さい」

「頼んだぞ」

王子は一度子供に気遣わしげな視線を投げかけた後、城内に向か
って去っていった。

「さて行くぞ。・・・色々と酷い目にあつたのだろう。ゆっくりと
ここで心を休めるが良い」

やはり何の反応も示さない子供の傷の深さに初老の男は眉を顰め
手を差し出した。

「さあ手を。城内は広い。迷ってはいけぬからな」

子供はその手をじっと見つめた。

もしや言葉がわからないのかと思い始めた時にそろりと小さな手
を乗せてきた。

男は顔を綻ばせた。

＊１＊

宮殿内は静かだった。

特にこの離宮は王族とその世話をする者しか出入りすることが無いので特に。

「姫様」

雲一つ無い青い空を広く開かれた窓から見上げていた少女が振り返った。

華美では無いが上質のドレスを身に纏い、結い上げることが礼儀とされる髪を背中に流している。

しかし誰もが「はしたない」と眉を潜めるよりも、その艶のある黒髪にうつとりと目を細めるだろう。

何より少女は幼くとも後の美しさを確信させる容貌で、惜しむらくは抜け落ちたような表情の無さが全体に影を落としている。

だがそれさえも、彼女の生い立ちを知られば然にあらんと同情と憐憫を寄せるだろう。

「本日は良いお天気でございますね。庭にお出でになりますか？」

こちらはシニヨンキャップで髪をきつちりと纏め、女官に支給されるエプロンドレスを身に纏っている。

柔和な笑顔は反応の薄い少女に気にすることなく向けられている。

少女は少し考えたように動きを止め、首を横に振った。

「まあ。それでは本日も図書室に行かれますの？」

こくと少女が頷く。

「本当に本がお好きなのですね。シェーラ様は」

そう言われた少女は一拍置いて頷いた。

「ですがお昼にはお戻り下さいね」

「・・・？」

「本日は殿下がお渡りになるとのことですから」

やはりそれにも表情を変えず少女は頷いた。

表情を翳らせたのは女官のほうだった。

「殿下・・・兄君様はシェーラ様がご心配なのですわ」

己の義妹という立場になった少女のことを、兄王子はとても心配し、心を砕いていた。

言葉を返せない少女に苛立つことなく相手をし、不便は無いかと忙しい中離宮まで足を運ぶ。

「姫様がこちらにいらしてもう一年。早いものでございますわ」

しみじみ呟いて女官は朝食を片付けて行く。

その様子を少女はやはり表情を変えず見つめていた。

離宮に併設されるように建てられている図書館は5代か6代か前の王が書を好む妃のためにと建てたものだ。そのためごく限られた者しか出入りしないが所蔵数も多く、ここにしか無いような貴重な本も置かれていた。

その図書館の更に奥の部屋で少女は熱心に本に目を通していた。手にある本のタイトルは『属性魔法 火の章』。

中級レベルの火属性の魔法について詳しく書かれた教本だった。火属性といえば、主な魔法は攻撃魔法となる。少女が興味を示して読むには少々物騒だった。

「・・・・・・・・」

活字を真剣に追っていた少女は小さく溜息をつく。

静かな部屋では小さな溜息も大きく響く。

『魔と起源』『初歩的魔導書』・・・などなど少女の傍らには魔法関係の書物が重ねられている。

この国では魔法を使える者というのは珍しくは無い。庶民でも生活に使うちょっとした魔法は使うことができる。

それ以上のことを知りたければ王立の魔導学校へ行くことになる。

魔導の才能があると認められれば庶民も通うことが可能だ。

伊達に近隣随一の大国の看板を掲げていない。

まして魔王を討伐した勇者を王子としているのだから。

少女の握り締められた小さな手が震えている。

本を傷めないようにと小さく切りとられた窓から見える塔を見つめた。

そこは禁忌の塔。決して近寄ってはならないと戒められている。

そこには魔女が封じられているという。

この世界を破滅に導こうとした魔女が。

* 2 *

少女が自身の部屋に戻ると太陽が居た。

否、彼こそが魔王を打ち倒した勇者。この国の王子であり少女の義兄である。

「お帰り、シエーラ」

「また図書館に行っていたの？」

穏やかに少女を迎え入れる王子ともう一人。

王子とよく似た容貌の、少女より五つ六つ年上の美しい女性だった。

「ユーリア」

嗜めるように王子が名を呼べば、ばつが悪そうに口を閉じる。

「お前も剣ばかりでなく少しは書にも興味を持ったほうがいいのではないか？」

「・・・だって文字を見ると眠たくなるのですもの」

ぷいと顔を背けた女性は少女に近づくと腰をかがめてその手をとった。

「シエーラ。お姉さまとランチにしましょうね！今日はお庭にテールを用意させたのよ！」

『お姉さま』と言うからにはこの女性もまた王女なのだ。

反応の薄い・・・というより皆無な少女をお構いなしで手を引いて行く。

それをやれやれと肩をすくめながら王子が続いた。

離宮にある庭園は、例の本好きな王妃によって様々な花が植えられ一年を通して花の枯れる時が無い。

今の時期に咲いているのは薄紅の花びらのアンネローズという小

ぶりの可愛らしい花だ。

「アンネローズはシェーラのような花ね」

ユーリアはそう言ってテーブルにも飾られているアンネローズを手にとるとくるくるつとまわしてシェーラの髪に飾った。

「ほら似合う。お兄様もそう思われるでしょう？」

「そうだね。シェーラはお前と違って可愛らしいから」

「もうっお兄様はいつも一言多いのですわ！」

「そうかな？・・・シェーラはどう思う？」

「シェーラを味方につけようとしてもそうはいきませんわ！」

二人の間に挟まれた少女はその騒がしさにも関わらずもくもくと食事を口に運んでいる。

傍に居る女官も慣れているのか、微笑さえ浮かべて給仕をしている。

彼女は先ほども少女についていた女官だった。

「アニー。貴方はどう思う？お兄様って一言多いわよね」

「そう言うお前は二言も三言も多いだろう？」

「もうっああ言えばこう言うー！」

じゃれかかる子犬をあしらうように王子は悠然とした姿勢を崩さない。

一見仲が悪そうに見えるがお互いの言葉に悪意は含まれていない。だからこそ穏やかな雰囲気は崩れない。そして無言の少女は異質だった。

「僭越ながら申し上げさせていただければ、一の姫様にも姫様と同じように御手を動かしていただきたいですわ」

女官の言葉にうっとうと口を閉じた王女は小さく溜息をついてフォークを手にとった。

せっかく用意してもらった料理が冷めてしまう。

「シェーラ、美味しいかい？」

王子の問いかけに一瞬動きを止めた少女は、小さく頷いた。

「それは良かった。たくさん食べなさい。大きくならなければ、ね

？」

少女は感情を写さない黒い瞳で王子を見つめた。

少女の反応は薄く、言葉も発しない。せめて表情でも動けば違うのだろうがそれさえも鈍い。

養女となった当初、名ばかりの姫とはいえ容姿の可憐さから周囲も騒がしかった。

亡国の姫君がその愛らしさゆえに魔王に攫われたのだと。

しかし哀れみも、甘い言葉も、罵りさえにも反応を見せない少女にやがて周囲に集っていた人々は少なくなり、少女は離宮の奥へ身を潜め表へは出なくなつた。

そんな少女を唯一気にかけるのが、魔王の城より救い出した王子とその妹姫だつた。

「ねえシェーラ。今度街へ買い物に行きましょう？」

「……」

少女は首を横に振つた。

「大丈夫よ。何も心配することは無いわ。世界で一番強いと評判のお兄様が護衛ですもの」

「私がついて行くこと前提か……」

「あら。お兄さまは私とシェーラに何かあつてもよろしいの？」

「お前はともかくシェーラは心配だな」

何しろユーリアは一騎士団を任せられるほどの剣の腕を持っている。

「何も遠慮することは無いのよ。あなたは私たちの妹なのだから」
任せておきなさいと張り切る王女は、少女が首を振って断つたことは記憶に残していないらしい。

困ったことだと呆れながらも王子が口を挟まないのは、王子も偶には少女が外に出たほうが良いと思っっているせいなのか……。

「あらあら。それでは私は姫様のご用意をしなくては」

女官も久しぶりの腕の見せ所に気合を入れるのだった。

*** 2 * (後書き)**

ほのぼのの空気が漂っておりますが、シリアスです。

* 3 *

少女の手の平に小さな炎が点っていた。
それは初めて少女が手にした魔法の欠片だった。

ここ数日、王宮は慌しい気配に包まれていた。
喧騒とは遠いところにあるはずの離宮にまでその騒々しさが伝わってくるのだから相当だ。

だがおかげで王子も王女も姿を見せない。
気軽にどこにでも出歩いているように見えるが、この国の軍事の中枢にある二人の仕事は多く責任も重い。

少女は手のひらの火を消すと、部屋に置かれているチェストの引き出しを開けた。

茶色のマントは先日城下への買い物にお忍びで連れ出された時に着せられたものだ。

目立たないようにと地味なものを女官は選んだのだろうが、どれほど地味にしようと三人揃っていると目立つなというほうが無理な話だった。王子や王女は鬘まで被っていたが効果は無いように見えた。

女官も苦笑して見送っていた。

そのマントを取り出した少女は、周囲をもう一度伺って庭へと続く扉を潜った。

目指すのは図書館から見えた聳え立つ塔。

見つければ引き止められる。

そこには近づかないようにと皆が口を揃えて少女に注意した。魔女が居るから。この世界を破滅に導く魔女が封印されているのだと。

おかしい話である。それならば魔王だって封印できたのではないのだろうか。

それとも魔王より魔女のほうが強いとも言っただろうか。

塔の下にたどり着いた少女はぐるぐるとそこを回る。

石レンガに継ぎ目が無く、どこにも入口が無いのだ。

困ったように上空を見上げ、そっと石レンガに手をついた。すると・・・

「っ！！！」

ずっと引き寄せられる感覚がして、少女は踏鞴を踏むように塔の中へと転がった。

くすくすくす。

頭上から響いた笑い声に膝をついていた少女は勢いよく身を起し、声のしたほうを見上げた。

「久しぶりのお客様・・・いえいえ、初めてのお客様ね」

豊かな銀色の髪が視界全体を覆い尽くす。

女は宙に浮いていた。

「ようこそ小さなお姫様」

妙齢の美女にしか見えない魔女は楽しそうに笑い声をたて、少女の周囲をくるくるまわる。

引き止めようと少女は手を伸ばすが、届いたと思った瞬間に銀の髪は空気に溶けるように消えてしまう。

「予言の魔女である私にどんな御用かしら？」
果たして声を無くした少女がどのように魔女に訴えるのか。

「弟子にして」

声を失ったはずの少女は、小さくけれどはっきりと口にした。
少女は声を失ってはいなかったのだ。

* 4 *

じつと少女は魔女を見上げていた。

己の言葉がどのように届いたのか、魔女がどのように反応するのが見定めるように。

「弟子？私の？」

さも面白いことを聞いたとばかりに目を丸くし、軽やかな笑い声をたてる。

「・・・何がおかしいの」

「おかしいわ、おかしい。この私にそんなことを言うなんて。知らないの？私は予言の魔女よ」

「・・・・・・・・」

少女の顔に訝しげな色が浮かぶ。

少女が知っているのは、この塔には破滅を招く魔女が封印されていることだけだ。

それが『予言の魔女』と呼ばれているのかは知らない。
だから。

「知らない。でもあなたは魔女でこの世界を滅ぼすほどの力を持っているんでしょう？」

少女の言葉に魔女はまた笑う。

「世界を滅ぼしたいの？」

「・・・いいえ」

「おかしいわ。世界を滅ぼす気は無いのに滅ぼす力を求めるの？」

「世界を滅ぼすほどの力が欲しいから」

じつと少女と魔女の視線がぶつかりあう。
どれほどの時間、見詰め合っていたのか。

「良いだろう。運命さだめの娘」

魔女の声のトーンが変わった。低めに、腹の底から響くような声に。

「お前の思惑如何によらず弟子にしてやろう」

朱唇がにやりと歪み、背筋が凍るような不気味さが増す。

「ただし」

「・・・・・・」

「私の言う条件が呑めれば、よ」

再び魔女の声が軽いものになる。

「・・・・何？」

「先には言えないわねえ」

聞かなければ弟子にはなれない。聞けば後には退けない。

「私の目的を達成する障害にならなければ、呑んでもいい」

「心配いらないわ。ちよつとしたお願いだもの」

宙に浮いていた魔女が少女の傍に下りてくる。

そして内緒話をするように耳元に口を寄せ、囁いた。

「・・・・・・」

「ね？簡単なことでしょう？」

ふふふと少女の反応を楽しむように魔女はその周囲をふわふわと回り始める。

「もちろん貴方が目的を達成した後で構わないわ」

魔女が何を言ったのか。

少女は変わらず固い表情で自分の周りをぐるぐると回る魔女を見つめた。

その中に何か罫が隠れているのでは無いかと見定めるように。
そしてゆっくりと目を瞬いた。

「その条件で、良い」

パンツと何かが破裂したような音がして、少女に無数の白い花びらひらひらと舞い落ちる。

「取引成立ね！」

最後にくるりと一回転した魔女が、少女の目の前に降り立った。

「改めて自己紹介しましょう！私は予言の魔女。グリンダよ」

貴方は？と魔女が首を傾げる。

「私は・・・」

少女の瞳に一瞬迷いが浮かぶ。

「サラ。そう呼ばれてた。・・・本当は違うけれど」

「いいわ。じゃあ貴方のことは”サラ”と呼ぶわね！」

こうして少女は魔女の弟子となった。

部屋に戻った少女は絶妙のタイミングで現れたアニーに身包み剥がされた。

あと一歩遅ければ出歩いていたことがバレていたかもしれない。

「姫様。隣国からの御使者がいらっしゃるそうです」

「……………」

それで王子も王女も忙しく立ち回っていたのだろう。

だがそれが少女にどのような関係があるのか。姫とは名ばかりの居候に。

「あら。そのような顔をなさって。姫様も鳳凰の間にいらっしゃるのですよ」

「……………」

少女は首をかしげ、そしていやいやと首を振った。

「駄目ですよ。陛下と殿下のお言葉ですから」

人前に出ることを極端に忌避する少女に、それではいかんと事ある毎に王と王子は引つ張り出そうとする。本気で嫌がれば渋々折れる二人なのだが今回ばかりは効かないらしい。

アニーは準備万端でドレスを抱えている。

少女は嫌そうに大きな溜息をついた。

広間に姿を現した少女の姿に、一瞬の沈黙が落ちる。
誰もが少女に視線を飛ばし、様々な思惑を孕ませる。
名ばかりの王女とは言え『王女』であることに変わりはない。ましてや王も王子も分け隔てなく接するのを目にすれば。

「シェーラ。よく似合うよ」

王子の言葉に僅かに頭を下げる。
アニーが少女のために用意したドレスは白を基調として、紫のフリルで飾られていた。

少し大人っぽい雰囲気もあるそのドレスは少女の黒髪をより美しく見せた。

「いつもよりずっと大人っぽくて素敵ね！」

ユーリア王女も少女を囲む。

「殿下方、どうぞこちらへ」

宰相が王の元へ王子たちを招く。

「揃ったな。我が子供たち」

穏やかに王が笑っている。その隣の王妃の席は長らく空席だ。

「そうして三人揃っていると下手な絵画を見るより眼福だな」

王子は母親譲りの金髪、王女は王譲りの燃えるように赤髪、そして少女の漆黒のような黒髪。

容姿を褒められた王子は軽く頭を下げ、王女はにこりと笑い、少女の表情は動かなかった。

「さて、お前たちにアルカーナの使者殿を紹介しよう」

王の言葉に待ってましたと使者が進み出る。

その中の一際派手な衣装を身に着けた女が第一声を発した。

「お目にかかれて光栄ですわ、イルシオン殿下。魔王を打ち倒した高名はわが国にも響き渡っております」

女の目は獲物を狩る狼のように飢えていた。

「それは恐縮です。しかし魔王を倒すことが出来たのは私の力だけではありませんから」

「まあ謙虚でいらっしゃる」

ほほほと笑い声をたてる様に、ユーリア王女の眉が寄る。

使者だというのに高飛車な態度の女は誰なのか・・・恐らくはアルカーナの王女あたりだろうと見当をつける。

「改めまして。私、アルカーナの第一王女リリアーナにございます」
礼儀作法にのっとりドレスの裾を持ち上げ頭を下げる・・・王子だけに。

ユーリア王女の顔が明らかに不快そうに歪められた。

「此度は貴国と我がアルカーナの親善を深めるために参りました」
貴国というよりは『貴方』と親交を深めたいのだとリリアーナの目は訴えていた。

「遠いところをわざわざお越しいただきありがとうございます。わが国に名物というものはそう多くはありませんが美しい国です。どうぞ楽しんで行って下さい」

王子はリリアーナ王女の訴えを軽く無視して、外向け用の笑顔を貼り付けている。

「よろしければ殿下に案内をしていただけませんか？」

「残念ながら、先約がありまして。翌日より軍の演習に出ることになっております」

王子の肩書きには軍の総統というものがある。その名の通りこの国において軍の最高指揮官である。

「まあ・・・それは残念ですわ」

「申し訳ございません」

しかし何事もトップが動くというのはあまり無い。

軍の演習があると言っても、王子がすべき役割はその計画と結

果の報告を受けることだ。

つまり、王子が演習に出るなどただの断る口実だ。

そんな事情など察することが出来ないリリアーナ王女は額面通り受け取って落胆している。

これで柄が悪ければ舌打ちでもやりかねない雰囲気だった。

「代わりと言ってはなんですが、妹が貴方の案内を致しましょう」「は？」

予想だにしない飛び火にユーリア王女の顔が盛大にゆがんだ。

その顔が『誰がこんな女の相手など。冗談ではない！』と叫んでいた。

「こつ見えても我が国の一軍を率いるもの。護衛としても打ってつけでしょう」

「ああ、それは良いな。女同士にしかわからぬ話もあるう。年頃も同じ頃であるし。どうかナリリアーナ王女？」

王にまで言われてはユーリアもリリアーナも断る術を持たない。

「ま、まあ頼もしいですね。よろしくお願い致しますね」

「・・・武人ですので気のきかないところもありますが、私でよければ」

二人の王女は互いに微妙な空気を抱きながら微笑みあった。

「シェーラ。明日は空けておくんだよ」

こっそり王子が耳元で囁いた。

少女は目に沁みるような青い空を見上げた。

「晴れて良かった」

背後で王子がそう呟いている。

現在、少女は王子に抱かれて馬に乗っていた。

ちなみにユーリア王女とリリアーナ王女は昨日約束した通り二人で（もちろん護衛も居たが）城下に出かけたらしい。

そして何故少女が馬上に居るのかと言えば・・・

朝食を食べているところへ王子の襲撃に遭ったからだ。

「シェーラ。散歩に行こうか」

にこやかに現れた王子に、いつもの庭園の散策だと思った少女は無表情で頷いた。

しかし少女を連れた王子は庭園を通り過ぎ、離宮の出口まで来るとそこに繋いであった馬に少女を抱き上げ、あっという間に走り出した。

少女が拒絶する隙もなく、王子は馬を走らせると城下を抜けたところで速度を緩めた。

そして現在。

草原地帯をかばかば馬に揺られながら『散歩』しているというわけだ。

「もう少し行っただころだよ」

何が。

声が出たならば少女はきくと聞いたことだろう。

「シェーラに見せたいと思ったんだよ」

草原にある小高い丘を登って、見下ろした先には湖があった。

少女が無表情で見下ろした先には、鹿の親子が居た。

母鹿と思える足元に二頭の小鹿が戯れている。警戒心の欠片も伺えない。

微笑ましいワンシーンだ。

「先日演習の際に見つけたのだよ。このあたりは天敵となる肉食の獣が居ないから安心して子育て出来るのだろう」

鹿の親子を見る少女の無表情はびくりとも動かず、その表情からは喜んでいいのか悲しんでいるのか可愛いと思っているのか全くわからない。

その表情が見えないからか、王子は気にせず楽しそうだ。

「もう少し近づいてみようか」

馬首を返して丘の横から湖のほとりへと下りて行く。

ここまで近づくとも野生動物なら警戒して逃げていくものだが、母鹿は僅かに視線を向けただけで逃げる様子は無い。それどころか小鹿たちの一頭が王子たちに近づいてくる。

おぼつかない足取りで馬へと近づいた小鹿は不思議そうに見上げて、母鹿に戯れるように馬の足に擦り寄った。馬は僅かに鬱陶しそうにしながらも好きなようにさせている。

「無防備なものだ。・・・もう少し警戒心を持ったほうが良いな」

王子はそう言うとも母鹿のほうを向いた。

母鹿は子供の様子を伺っていたが小さく鳴くと、馬にじゃれついていた子供が一目散に駆け寄ってく。

帰ってきなさい、とでも叱られたのだろうか。

「母鹿のほうはそれなりに聡い、か。・・・ん？」

少女が見上げていたのに気づいたのだろうか。王子が苦笑する。

「少し殺気を飛ばしてみたのだよ」

返された言葉に少女は鹿へと視線を戻した。

（俺は野生の動物を見たことが無い。・・・動物は人と違って勘が
良い）

少女はきよろきよると首をまわした。

「どうした？」

「・・・」

少女は俯き首を振った。

もう鹿たちにも目をやらない。

どこか意気消沈した空気を感知取ったのか王子は困ったような顔
をしながらも帰路についた。

帰城した城には鬼が居た。
鬼の名はユーリアと言う。

「お兄様っ！！」

離宮の入口に仁王立ちで二人を待ち受けていた。

どうやらユーリア王女を出汁にして二人で出かけていたことがバレたらしい。

「ただいま、ユーリア」

だが怒っているユーリア王女を気にすることなく王子は悠然と馬を下りると、続けて少女を抱き下ろす。

「私怒ってますのよ!」

「そのようだ」

怒り心頭に達しているらしい王女は腰に手を当て王子に詰め寄る。
「すまなかつたね。リリアーナ王女の毒気は少々シェーラには強すぎるだろうと思ったのだよ。その点、ユーリアならば上手くあしらってくれるだろう?」

「ま、まあ確かに。私ならともかくシェーラでは好き放題に言われてしまうでしょうけれど」

「そうだろう」

わが意を得たりと王子は頷く。

「シェーラもユーリアに感謝しているよ」

「シェーラが?・・・本当に?」

何故か未だ王子に抱かれたままだった少女はユーリアの問いかけるような視線に、無言で頷いた。

「・・・それなら仕方ありませんわね!」

上手く丸めこまれた王女は、上機嫌になって少女と王子と共に離宮に入っていく。

王子と少女はそっと視線を見交わした。

「あなたに魔法の才能は無いわね」
魔女は宣告した。

「・・・弟子にする前に言って」
少女が魔女を睨みつけた。

「あら嫌だ。才能が無いと言っただけで使えない訳じゃ無いのよ」
ほほほ、と相変わらず魔女は軽やかに浮遊している。
少女にとっては鬱陶しいだけだろう。

「才能は無い。でも魔力はあるのよ」
「で？」

「だから努力でカバーしなさい」
他人事のように言って、魔女は大量の本を積み上げた。

「才能溢れる私には無用だったけれど凡人のあなたには必要でしょう？」

「・・・それはどうも」

いちいち勘に触る魔女の言葉に多少の機嫌の悪さを見せつつも少女は無表情でそれらを受け取った。

努力することに抵抗は無いらしい。

少女の座るテーブルの脇に積み上げられた山から一冊取り上げる。
「それは火の属について書いてあるわ。きっとあなたと一番相性がいい」

「・・・わかるの？」

「燦るのは闇の炎。照らすは聖なる光。天地を貫き永久とこしえに」
魔女の言葉は時折意味不明となる。

予言なのか言葉遊びなのか判断が出来ない。

少女は無視して本に目を戻した。

魔女に弟子入りしたからといって、何かが劇的に変わったわけでは無い。

ただ少女は時間を見つけてはそつと塔にやって来て、城の図書室にも置いていないような魔術の本に目を通す。その本の数は何処に仕舞われているのかもわからないほど膨大で、果たして読み終わることが出来るのかもわからない。

だから努力しろと言うのならば、そうするしか無いのだろう。一刻たりとも無駄にすることなく、読み続けるしかないのだ。

目的を果たすために。

「まあ姫様っ！こんなところにいらっしやるなんて！御髪に草がついてらっしやいます」

塔からそつと抜け出して、草をかきわけた先の庭でアニーに見つかった。

「隠れ鬼でいらっしやいますか？」

草をつけた様子の少女が面白かったのだらう、思わずといった様子でアニーが笑いを漏らす。

少女は首を傾げた。

「そうですね。ユーリア様がお探しです」

「……………」

「成人の儀が近うございましょう。そのお衣装選びをしたいのだそうです」

ますます少女は首を傾げる。王女の成人の儀式に少女は全く関係が無い。……はずだ。

少女の疑問にはアニーが答えてくれた。

「花束を渡す役の少女をシェーラ様がなさるので、お揃いで衣装を揃えたいのだと仰って」

「……………」

「……お伝えしていませんでしたかしら？」
全くもって。

無表情で不機嫌になるという器用な特技を披露しながら、少女は容赦なく連行された。

「シェーラ！もう何処に行っていたの？」

部屋に入るなり腕を引かれて、長椅子に掛けさせられた。

その隣にユーリアが座る。

目の前には色とりどりの布が散乱していた。

「次はそれを見せて下さる？」

戸惑う少女も何のその。王女は商人らしき相手に指示を出す。

「……そうでん。デザインはそれでいきましょう。色は……私とシェーラでは似合う色が違うから別々にしたほうがいいわね」

そして今度は色の選定に入る。

次々と自分で決めて行くユーリアの隣の少女は何もすることが無い。

「この青色はどう？シェーラによく似合うのではない？」

「ええ、お似合いですわ」

「ではこれにしましょう。私は……やはりこの赤かしらねえ」
シックな赤色は王女の鮮やかな赤髪を更に際立たせるだろう。

「シェーラはどう思う?」

問いかけに少女は、こくりと頷くばかり。

あれもこれもと、何故か式典以外のドレスも注文され、少女の瞳は知らず閉じていた。

「あら、眠ってしまったの?」

「姫様はあまりご興味がございませんから退屈だったのでしょう」

「・・・まだまだ子供ねえ」

そう言う王女の顔は微笑ましそくに笑っていた。

＊ 8 ＊

魔女が嗤う。

今まで浮かべた中で最高に鮮やかに嗤う。

「免許皆伝よ！」

「・・・何が」

「貴方に教えることは何も無いわ」

「特に何か教えてもらった覚えも無いけれど？」

「可愛くないわね」

少女が魔女の塔に通うようになって二ヶ月が経った頃だった。

「気づいてなかったの？」

「何が？」

ふふふ、と魔女が笑う。

「この塔の中は時間の流れが違うのよ」

少女の顔がぎよっとして魔女を見上げた。

「あら。心配はいらないわ。この塔の中だけ。切り離されているだけだもの。外の時が流れても、外の時が止まっても。ここは別の『モノ』なのよ」

魔女の言葉が果たして真実なのかどうか、少女は今さらながら自覚した。

何時間も、それこそ城の者たちが不審に思わないはずが無いほどの時間をこの塔で過ごした。

少女はただそういう『気』がしていただけと思っていたが、真実は過ぎていたのだ。

「だから、あなたの手にあるその本が」

最後の一冊なのよ。

魔女の言葉に少女はぎこちなく、本の表紙を閉じた。

「・・・読んだだけよ。まだ何もしていないわ」

「知識は力よ。この頭の中に、すでに力はある」

それをどう使うかは、少女次第なのだ。

ふわふわと漂っていた魔女が少女の目の前に降りてくる。

「さあ約束の時が来たわ」

少女は魔女と約束した。

弟子にする代わりに魔女の願いを叶えると。

「私を滅^{はろ}て」

少女は座っていた椅子から立ち上がる。

魔女は笑顔で佇んでいる。

「・・・て」

少女は目を閉じる。

「どうして、そのままではダメなの・・・？」

「待っているの」

魔女はまるでこちらが少女のように夢みる眼差しで呟いた。

「愛した人が待っているの」

少女が胸を抑えた。

「・・・待っている、の？」

「ええ。ずっと待っていてくれるわ」

「・・・そう」

少女の手に光が集う。塔の闇を打ち消すほどの強い発光が迸る。

「私は、残されてしまったのに」

光が弾け、粒子となって降り注ぐ。
魔女の姿はもうどこにも無かった。

『小林沙耶』

「我、我が名に誓う」

誰も呼ぶことの無いその名に。

我が敵に、死を。

逆章

ここはどこ？

「・・・お前。どこから入りこんだ」
「え？」

周囲を黒い壁に囲まれた広い部屋。
光が無いというのに、何故かそれがわかった。
そして大きな溜息をつかれたことも。

「世界の迷い人か。何もこのようなところに現れずとも」
「・・・誰？」

ちつとも怖いなんて思わなかった。だから誰なんだろうと不思議に思った。

「私は小林沙耶」

「・・・コバーシサーラ」

「・・・それ誰」

「お前の名だろう？」

「違うっ！小林、沙耶！こ・ば・や・し・さ・やー！」

「サラ」

「・・・」

かくり、と少女の首が傾いた。

「で、あなた誰？」

「俺か？聞いたら後悔すると思うがな」

「はあ？」

聞いたら後悔する名前なんて聞いたことも無い。

「で、誰？」

「魔王だ」

「まおう、さん？」

何だか女性のような名前だ。

「………仕返しか？」

「はあ？」

少女の眉が不審げに顰められた。

そんな私と魔王の出会いでした。

ご使用は計画的に。

魔女の塔から出た私は、世界が変わっていたことに気がついた。
否。世界が変わったんじゃない。私が変わったんだ。

どういう理屈かわからないが、世界には魔力が満ちている。これ
ほどのものを何故今まで感じとれなかったのか不思議なほどだ。

呪文なんて必要ない。

ただ、そうしようと手を伸ばせば世界から身の内から魔力が溢れ
出て形を成す。

「・・・・・・・・」

・・・・ああ。

ああ！

叫びだしたい。

私は力を手に入れた。

焦らない。・・・・焦らない。これからのだから。

「姫様？・・・・姫様っ！？」

アニーの掛け声に少女は振り返った。

「どうなさいましたっ・・・・何かお辛いことが？もしや、どこか怪
我でもっ！？」

何を慌てているのかわからないが、どれも違う少女はただ首を振
った。

辛いことも怪我もしていない。

ただ、嬉しいだけ。

嬉しくて、涙が出ているの。

「今日は外の風が冷たいですわ。中に戻りましょう」

アニーの言葉に特に断る必要も無かった少女は、促されるまま離宮の部屋へと戻った。

離宮には魔力が満ちている。

部外者を進入させないための結界だ。

守られているのか、監視されているのか・・・魔王の城から救出された身元の知れぬ少女を警戒するのは無理も無い。

その割に王子や王女という要人がこだわり無く出入りしていたのは、少女の無力に見える様子ゆえか。

「姫様。何か飲まれますか？」

「・・・」

こくと頷くと紅茶に似た飲み物をミルクで割って出してくれる。それが少女の、沙耶の気に入りだと知っているから。

何も知らない、ただ少女の世話をしてくれることの人は・・・。

「お熱いですから気をつけて下さいね」

ありがとうと心の中で呟いてカップに口をつけた。

「いよいよ明日でございますね」

「・・・」

少女は出来上がった青いドレスを思い浮かべた。

第二王女ユーリアの成人の儀が行われる。この世界ではそれが結婚式の次に盛大に執り行われるものらしい。各国の代表者も揃う。

そのほとんどがユーリア王女というよりは、勇者であるイルシオン王子が目当てであっても。

「髪はどのように結び上げましょう？飾りは銀細工がよろしいかしら、金細工・・・」

ぶつぶつと夢見るように話し出したアニーは放っておく。

・・・警備は厳しいものとなるだろう。

だが少女は主役の最も近い場所に居る。もちろん本当の主役もすぐ傍だ。

少女はそつと誰にも見えないように、笑う。

まずは、揺さぶりをかけよう。

その力がどれほどのものか見極めよう。

ねえお義兄さま。

私の仇。

翌朝は早くから起こされ文字通り体を磨かれた。

「・・・・・・・・」

「成人の儀はこの世に生み出して下さった神に感謝する式典です。身も心も清めるのですよ」

内心の不機嫌さを悟ったアニーがそう説明してくれた。

すでに抵抗する気力の無くなっていた少女はぐったりと椅子に掛けている。

タオルドライされた髪を魔法で丁寧に乾かされている。

「美しい黒髪ですこと」

ブラッシングされた髪は艶々と光を放つようだ。

しかし主役はあくまでユーリア王女であり少女では無い。なぜここまで気合を入れなければならぬのか・・・

「髪飾りはこちらの白金のティアアラに致しました。服と同じ青石ですから髪のお色ともよく合いますわ」

そうですか。

とかし少女には思えない。

髪が出来た少女は立たせられローブを取られて白いビスチエを着せられる。総レースのそれは機械の無いこちらでは、かなり高価な代物だ。しかも少女が着るような子供サイズでは成長してしまえば用済みになつて着ることが出来なくなる。

しかしそれがどうした。このビスチエの1枚・・・100枚や千枚でこの国の身代が揺らぐはずも無い。

「姫様はまだお若いですから腰紐はあまりきつく結びませんわね」

それには無言で頷く。

アニーは満足そうに微笑んで、用意していた青いドレスを手にとった。

まだ若い、幼いといってもいい少女が着るドレスは踝の長さまでしかない。

胸元にはビスチエのレースがちらりと覗き、袖は花びらのように薄い布が重ねられている。

手に白い手袋を嵌められ、光沢のある服と揃いの靴を履かせられて姿見の前に立たせられる。

「きつと誰もが姫様に魅せられますわ！」

注目はされるだろう。

何しろ『黒』はこの国で特別な意味を持つ。

その時扉を叩く音がしてアニーが入口に向かった。確認するまでも無い。

この離宮に足を踏み入れることが出来るのは王子と王女。そして王女はこの儀式の主役でのんびり出歩くことが出来ないとなれば・・。

「シェーラ」

鏡に満面の笑みを浮かべる王子が映っていた。

「とても綺麗だよ」

「・・・・・」

「本当に。誰もがきつとシェーラに注目するよ」

違う意味で、ね。

「本当に綺麗だよ、お姫様」

王子がシェーラの手をとって口づけた。

衝動的に払い落としそうになるのをぐつと我慢した。

「アニー、もう準備は万端かい？」

「はい。問題ございません」

「では、お姫様。私めにエスコートを勤める栄誉を賜り下さいますよう」

「・・・・・・・・」

似合わない人間がすれば滑稽にしか見えないことも王子がすれば嵌りすぎて笑いさえ出来ない。

シェーラはやはり無表情で無言で、手を出した。

何故こんな無表情な子供に構い続けるのだろうか？

「ありがとうございます。では参りましょう」

子供といえど、身元も知らない不審人物である少女を王家の養子に迎え入れることが出来たのはこの王子が働きかけたからに違いない。

何を考えているのかわからな男に手を引かれながら、少女は離宮の外へと続く扉を見上げる。

この離宮に連れてこられて以来、2度目となる出入り。

この瞬間だけは離宮を覆っていた結界が消されている。

「シェーラ」

声をかけられ、一歩足を踏み出した。

本宮の大広間にはすでに人が集まり、真ん中を開けて両脇に整然と並んでいた。

少し遅れてやってきた王子と少女は否が応でも目だってしまう。視線が集中するのが肌で感じられる。

きつと以前の少女であつたら俯いてしまっただろう。

だが、誰がそんな弱いところを見せるものか。

少女に後ろめたいところも恥じるところも何も無い。

黒髪に忌避するような視線を投げかけようと、幼さに侮蔑を投げかけられようと。

全てはこの隣を歩く勇者のせいなのだから。

王子は玉座の前に着くと膝を折って、父でもある王に挨拶をした。少女もそれに習う。

「よくぞ参った我が誉れの子、わが国の勇者イルシオン」

「過分なるお言葉、光栄にございます」

「何を言う。そなたの英名を知らぬ者などこの国にも諸国にもおらぬ」

「恐れ入ります」

「姫もよう参った。話は常々二人より聞いておる」

王子の取り成しとはいえ、どこの馬の骨とも知れぬ少女を養女に迎えた王は快活に笑っていた。

少女は小さく頭を下げた。

二人は王より一段下に用意されていた席に腰掛ける。
いよいよ本日の主役の登場だ。

だが。

少女は無表情でその時を待つ。

「た・・・大変でございますっ!!」

荒々しく広間の扉が開け放たれた。

駆け込んできた兵士の尋常でない様子に、まずは両脇で控えていた貴族たちが騒ぎ出す。

今にも兵士が開け放った扉から逃げ出しそうな様子だ。

「如何した!」

しかし王子の大喝に広間は静まり、兵士が駆け寄ってくる。

「報告致しますっ!!・・・魔物が、現れてございますっ!!」

王子の顔が厳しく顰められる。

「王宮内か?」

「はいっ・・・王女殿下が防いでおられますっ!!」

それだけ聞くと王子はさっと王を振り返り、頭を下げた。

「行って参ります」

「うむ」

王の表情も厳しい。

有り得ない、そう言いたいのだろう。

堅牢な結界に阻まれた王宮には魔物が入り込む余地など無い。・・・

はずだった。

魔王を倒し弱体化したとはいえ全ての魔族、魔物が消えうせた訳ではない。むしろ魔王を倒した勇者が居るこの国は魔の者たちにとって仇敵とも言える。

そのために万全の体制を敷いていた。

「シェーラ。決してここを動かないように」

王子は言い含めるようにそう言うと、人々の間を颯爽と駆けていった。

無表情であることをこの時ほど少女は感謝したことは無い。

もしそつでなければ、こみ上げる笑いを我慢出来なかっただろう。

復讐は始まっている。

これはちよつとしたご挨拶。

これから始まる劇の幕開けに相応しい。

* 1 1 *
(後書き)

ご覧いただきありがとうございます。

離宮と本宮の間には庭園がある。

そこで阿鼻叫喚の惨事が繰り広げられていた。

人の4、5倍ありそうな魔物の容貌は赤黒く醜怪で異臭まで撒き散らしている。

幸いなのは、その巨体を生かして暴れる以外に能が無さそうなところか。

だが通常予測できない腕の長さや動きに兵士たちは苦戦している。城壁付近で座り込んでいるのは大方その腕によって殴り飛ばされた者だろう。

胸のプレートが陥没していることからその怪力さが伺い知れる。ユーリア王女が距離をとって四方より攻め込むように指示を出しているが、浮き足だっている兵士たちはろくな動きが出来ていない。王女の式典用の衣装はすでに無残な様だ。

「魔術師たちはどうした？」

近くに居る兵士に王子は声をかけた。

「何かあつてはならぬと本宮の警備に・・・」

王子は無言で頷いた。今まさにここでその『何か』が起こっているのだが。

居ないものを強請っても仕方ないと諦めたのか、王子は腰の剣を抜き眼前に構えた。

勇者という名は伊達では無い。

その瞬間に纏った覇気に暴れていた魔物が視線を動かした。

「お兄様っ！」

叫ぶ王女に下がるように指示を出す。

兵士たちも魔物から距離をとる。彼等も王子の強さを十分に知っている。

「はっ」

息を吐いた王子は、炎をまとった剣で魔物に斬りこんでいく。

魔物も地響きをたて、王子を押しつぶさんと腕を振り回す。

それを難なく避け、その腕を蹴って飛び上がり魔物の顔面に剣を叩き込む。

GYAAAAA!!!

一つしか無かった目玉を潰され、魔物は苦痛と憤怒にいつそう激しく暴れた。

しかしすでに王子は背後にまわり、足に剣をつきたてた。

再び魔物の叫び声があがる。

炎の剣は魔物の肉を焼き、何とも言えない異臭を撒きちらす。

だが王子は容赦することなく、今度は膝をついた魔物の腕を根元からぶった切った。

これで魔物の動きの半分以上は封じたことになる。

最後の抵抗とばかりに魔物は残った片手を無茶苦茶に振り回すが、すでに動きを見切っている王子は剣の炎を消す。一瞬元の鋼の色を取り戻した剣は、すぐに根元から光に覆われて行く。

これこそが王子を勇者たらしめる魔の者を屠る光の剣。

その剣を袈裟懸けに払い、露になった魔物の心臓に突き立てた。

UGYAAAAA!!!

魔物は断末魔の声をあげ、その命の火を消した。
後に残るのは骸のみ。

「・・・ば・・・万歳っ！王子殿下万歳っ！！」

「我らが勇者王子万歳っ！！」

兵士たちでは手も足も出なかった魔物をいとも容易く倒してしま
った王子に賞賛の声が上がる。

「お兄様・・・」

「大丈夫か？・・・酷い格好だな」

「・・・仕方ございませんでしょう」

苦笑した王子にユーリア王女が憤慨したように顔を膨らませる。

「良いのでは無いか。剣士であるお前には相応しかろう」

だがその言葉にすぐに口元を綻ばせる。

姫である前に剣士であると自負する王女にとって何よりの賞賛だ。
だがすぐに厳しい表情で周囲を見渡し兄王子を見上げた。

「シェーラはどうなさいましたの？」

「本宮の広間だ」

「まあっ！置いていらっしやいましたのっ！」

「さうがにこの場に連れて来るわけにはいかない」

「ですけど本宮に放置など・・・つまりですわ！こんなことをし
ている場合ではございませんっ！！」

王女にとって少女は庇護の対象である。

「そうだな、早く戻ってやろう。お前の成人の儀も始まっていない」

「・・・この格好でよろしいかしら？」

「仕方ないのでは無いか？」

「そうですわね！」

王女付の侍女たちが聞けば悲鳴をあげそうなことを言いながら王
子と王女は本宮に向かった。

誰も気づいていない。

魔物の骸から魔の根が根付こうとしていたことを。

本宮は有能な魔術師たちが張った結界で覆われ、魔の侵入の一切を防いでいた。

そのことは魔物の侵入と恐慌状態に陥ろうとした貴族たちを落着かせ、わずかばかりの余裕を生み出した。

そうすると自然と視線は異分子へと向けられる。

つまり『魔』の色を持つ少女へと。

彼女のことを詳しく知る者は無い。養女となったことを知らせた場以降、少女が社交の場に出てきたことは無かった。ひたすら王族しか出入りの出来ない離宮に居て接触も出来ない。

もしや養女としたのは擬態で、『魔』の物を監視していたのではないか。

今回の魔物の侵入は少女が居たからこそ起きたことではないか。

人々は疑心暗鬼に囚われる。

疑うような、厭うような・・・刺すような視線が少女へと集まる。だが椅子に座った少女は相変わらずの無表情で、魔の存在に騒ぐ様子も人々の視線に動じる様子もなくただ変わらず人形のように座っている。

それが異様だった。

「きつと・・・魔物よっ！」

金きり声で誰かが叫んだ。

一瞬静まりかえった広間がざわめく。

人々は責めるように少女を見、続けて誰かが叫ぶ。

「このままであれば私たちも襲われるぞっ！」

男の甲高い声が響く。

ざわめきは一層酷くなる。

見るからに非力な少女に向けるには憚られる非難はパニック寸前の群集には通じない。

「騎士たちっ！何をしているっ！さっさとあの魔物を排せよっ！」

「この国がどうなっても良いのっ!？」

周囲に立っていた護衛の騎士たちに動けと群集は叫ぶ。

しかし彼等は戸惑いはしても動くことは無かった。彼等と群集の違いは彼等を統率する王子が少女を実の妹と同等に扱っていることを知っているか否か。

「ええいつ！この腑抜けどもめっ!！」

怒りに赤く顔を染めた貴族の若者が騎士の一人に詰め寄り、腰に下げている剣を遣せと命じた。

「いけませんっ」

「騎士ごときが私に逆らうかっ!」

傲慢な物言いは自分が正しいと信じているからなのか。

若者は剣を奪うと少女に向かって突進した。どこかで悲鳴があがる。

「邪悪なる魔物よっ！滅びよっ!！」

鞘から抜き放たれた白刃が広間の明かりを反射し輝く。

少女は無表情のまま、身じろぎもせずその刃を見つめ続けた。

誰もが少女の死を予感したその瞬間。

貫くはずの剣は、鈍い音と共に宙を舞った。

「王族へ剣を向けるは反逆。どのような反論も意味は無い」
王子の厳しい目が若い貴族を貫いていた。

「う……」

うゝわああああっつ！と腕を押さえながら叫び声をあげ、その広間を駆けまわった。

その貴族の傍らにほとり、と落ちてきたのは。

剣を握った己の手。

勇者と称えられる王子は公明正大であるが、全ての者を平等に扱っているわけではない。

「シェーラ」

貴族の若者などすでに視界から追いやり無表情のまま座って眺めていた少女に近づき膝をついた。

「一人にしてすまない。怖かったらう？」

「・・・・・・」

「この騒ぎでは成人の儀式も別の日に改めなければならない。それでいいかい、ユーリア？」

「当然ですわ。このように汚れた場所でやりたくありませんもの。シェーラ、ごめんなさい」

王子に並んだユーリア王女に少女は首を傾げた。

「王族に剣を向けるなんてとんでも無い。怖がらせてしまったわ。」

「・・・お兄様、シェーラを離宮に連れ帰って下さいませ」

「・・・後処理があるのだが？」

「父上がいらっしゃいますわ」

兄妹の視線に王は苦笑を浮かべていた。

「すぐに戻って参れ」

「畏まりました」

王子は父王に頷くと少女を抱き上げた。

周囲の人々は息を殺してそのやり取りを見つめていた。すでに王子に腕を飛ばされた貴族の若者は騎士たちによって治療所に運ばれている。運がよければ腕もくっつけることが出来るだろう。

床に飛び散った血痕だけが、先ほどの惨劇の記憶だった。

人々は魔物の出現よりも、王子の行動とその結果に大きく慄いた。少女は紛うことなき『王族』であり、それを害しようとすれば貴族として容赦なく処断されるということに。

「アニー、シエーラを頼んだよ」
「お任せ下さい」

少女がすっぽり納まるような大きさのソファに下ろした王子は待機していたアニーに少女のことを言付けると本宮へと戻っていった。「びっくりしたでしょう？でももう大丈夫。怖いものはお兄様が片付けておしまいになったから」

少女の隣に座った王女は、怯えているだろう少女に精一杯に優しい言葉をかける。

少女は王女を見上げ頷いた。

「お二人ともお飲み物をどうぞ」

「ありがとう、アニー」

テーブルに置かれたグラスを王女が持ち上げ少女に持たせる。

「落とさないようにね」

「ユーリア殿下。姫様はもう幼子ではございませんよ」

「・・・そうね。つつい。だってシエーラったらいつまで経っても可愛いのですもの。シエーラもあと二年すれば成人ね」

保護された時から一言もしゃべらない少女の年齢をどのように判断したのか、現在12歳とされている。王族の常で成人すればすでに決まっている婚約者と結婚することになる。当然ユーリア王女に

も婚約者が居るはずだが少女は見たことも無ければ名前を聞いたことも無い。一切話題にあがらないのだ。

そして少女にはそのような存在は用意されていない。

それから世間話をしながら過ごすが、王女もアニーも魔物の話をすることは無かった。

「・・・ん？どうしたの、シェーラ？」

慎ましく王女の裾を引く少女に、その意味がわからず首を傾げる。

「ユーリア殿下。姫様はお着替えをされるようにと仰りたいのでは？」

「・・・そうね」

魔物と対して無残になった服のままだった。

「せっかくシェーラとお揃いで作らせたのに。・・・ちよつと着替えてくるわ」

「そうなさいませ」

「シェーラ。傍を離れるけれど今日の予定はもう何も無いからゆっくりしてね」

こくと頷いた少女は王女が部屋を出て行くのを視線で追い、その姿が視界からすっかり消えたのを確認して窓の外に顔を向けた。

『芽吹け』

心の中で魔法をかける。

もっとも強い野心を持つ者へ。

この国には有名な三人の騎士が居る。

一人はもちろん勇者であるイルシオン王子。

二人目は魔法の使い手でもあり、魔王討伐にも同行した騎士団団長。

そして最後の三人目は王弟ベトレイア。

王佐としても有能な彼は王女の成人に儀式にも当然出席していた。

「殿下。事の仔細について伺えますか？」

議堂には国政に関わる主要メンバーが揃っていた。

その視線が王子に一斉に向けられる。

王子は席から悠然と立ち上がると一同を見渡した。

「この度中庭に現れた魔物は第三級の魔物です。突然のことに騎士団も対処が遅れ浮き足だつてしまいました。が通常であれば十分に彼らだけで対処できたでしょう。問題は何故中庭に魔物が侵入できたのかということです」

前半の王子の言葉に安堵したのもつかの間新たな問題に顔をしかめる。

「王宮の結界が弱くなっているのでは？」

「それはあり得ません。綻びが無いかとすぐに確認させたところ見つかっていない」

「ではどうやって魔物は侵入したのか・・・まさか自分で結界を破り、侵入したところその部分を直したとでも？」

「ははは、随分と礼儀正しい魔物も居たものだ」

ああでも無いこうでも無いと暫く意見が飛び交った。

カンカンと皆を静める木槌の音がして王佐に視線が集中する。

「何れにしろこのようなことが二度とないようになければならない。魔王が滅びたとは言え、魔物は未だ世に蔓延っているのだから」

「王佐の仰る通り。魔物がどこから現われたのかその痕跡を現在辿らせている最中です。また初動が遅れた原因には騎士たちの気の緩みもあつたかと思われます。気を引き締め直して事にあたる必要があります」

「では調査は継続することとし、騎士たちの統率は殿下にお願い致します」

「畏まりました」

未だ何もはつきりしていない状態でこれ以上できることも無い。

「次に延期となったユーリア王女殿下の成人の儀式の日程だが・・・」

「これもすぐに明日にという訳にもいかない。それぞれに予定がある。

「少々遅れますが一月後の同じ日ということで如何でしょうか？」

王佐の言葉にめいめいが己の予定を思い出すように宙に視線を飛ばす。

「では特に反論も無いようですのでこれで決定とします」

王弟ベトレイアは無駄を嫌う。無駄な時間の浪費を何よりも厭う。

「では陛下よりのお言葉を頂きます」

皆が姿勢を但し、玉座に座す王に軽く頭を下げる。

それまで沈黙のまま皆の話を聞いていた王は立ち上がり、王佐に向かつて小さく頷いた。

「魔物一人に踊らされたとあつては他国から笑いものにされよう。

我が国は勇者を擁する国として強くあらねばならない。どこよりも強く、だ。それを各々肝に銘じそれぞれの職務を果たせ」

「はっ」

王の言葉に一同頭を下げる。
そのまま王は退場した。

「イルシオン」

「叔父上」

皆も退場し、残っていた王子に王弟が声を掛けてきた。

「些かやりすぎでは無いか？」

「そうでしょうか？皆に知らしめるには丁度良かったと私は思っています」

王弟が何を指して言っているのか王子も理解している。少女に対して無礼を働いた貴族に対しての処罰だ。

「シェーラは王族です。その氏素性がはっきりしないとはいえ、公式に王家の養女となったのです。それに対しての無礼を放置すれば王家を侮られたも同然。態度をはっきりさせておかなければ後々の禍根となると判断したがゆえの処置です」

「お前の言うことも最もなのだがな、やはり氏素性がはっきりせぬというのが痛いな」

「はつきりしなくともシェーラがただの平民で無いことは明らかです。所作も粗野なところが無く、労働の痕跡も無い。また教育係に話を聞いたところかなり高い教育を受けていたようでもあります」

「そうか・・・いずれかの国の貴族の息女であつたのやもしれぬな」
「もしくは王族の」

「・・・本人は未だに口がきけぬのか？」

「幼子が心に受けた傷がどれほどのものか想像することも出来ません。それを殊更に急かして状態を悪化させればこれまでの努力が無駄になってしまいうでしょう」

「しかし一生世話をするという訳にもいくまい？」

適齢期になれば国内の有力貴族、他国の王族・・・いずれか輿入れするのが王族に生まれたものの勤め。

「まだ先の話ですよ、叔父上。しかしそうだととしても、魔王の城より連れ帰った責任を疎かにする気はありません」

「そうだな・・・あの色彩を持つ限り、相手も見つかり難かろう」
黒は魔の色。

それはこの世界の共通認識でもある。

髪でも瞳でも体のどこかに黒を有する者は忌者として扱われる。

少女の行く末はそれだけで暗澹たるものと言える。

「そなたも早う兄上を安心させてやらねば」

「王太子としての義務は承知しています。王妃として相応しいと思う者が居ればいつでも私は迎え入れるつもりです」

「・・・それもまた難しいものよ」

王妃とは王と並び立つ者。王を補佐し、この国で一位の女性として全ての模範とならなければならない。それが出来ない王妃はただの飾りだ。

そんなものは必要無いと王子は言っているのだ。

王弟は苦笑するしか無かった。

王太子であるイルシオン王子には当然の如く婚約者候補が数人存在した。

だが、魔王討伐に行く際に生きて戻ってくることが出来るかわからないからということで全ては白紙に戻った。王子が無事に戻って来た後もそれは白紙状態のままだった。

幾人もの有力貴族、国外の王族が縁を結ぶことを打診してきたが王子はそのどれもに頷いていない。

「誰ぞ心に決めた者でもおるのか？」

王に聞かれて、王子は苦笑を浮かべた。

「そのような者はおりません。居れば迷うことなく妻に迎えております」

「ふむ・・・」

王家直系であり、希代の英雄である王子はそれだけの力がある。身分違いとて覆してしまうだろう。

「私が妻に迎える者はこの国で一位となります。誰もその権力を凌ぐことは出来ない」

今の王に妃が、王子の母親でも生きていれば話は別だったが。
「分を弁え、私と共に在ってくれる者。そのような人であれば、私は喜んで迎えいれましょう」

「・・・理想とはかくも難しい」

王は苦笑した。

「しかし、この見合いの申し込みはどうしたものか」

「全てを捨ておく訳にはいかないでしょう。選別した後、時間があれば相手に会うことも勤めでしょう」

「その中にそなたの理想の相手があるやもしれぬしな」

「そうであることを願います」

王子の顔に言葉通りの期待の色は無かった。

普段、余人の入ることの無い中庭には調査のための兵士や魔術師が姿を見せるようになった。

そこは離宮からも見える場所で、少女は上階のテラスからその様子を眺めていた。

「何か面白いものでも見つけたかい？」

少女が振り返るといつの間を訪れたのか王子が立っていた。

その姿を確認して、少女は再び中庭の人々に視線を向けた。

「ああ・・・見慣れぬ人間が入りしてすまないね。離宮には必要以上に近づかぬようには言っているが、落ち着かないかい？」

少女は首を振る。

離宮と中庭は離れている上に少女の部屋も最上階にあるので、例え下の人々が視線を上げたとしても少女の姿に気づくことは稀だろう。

庭から視線を外して少女は部屋の中へ戻った。当然王子もついて

来る。

「ユーリアの成人の儀は一月後に決まったよ。儀式のために用意した服がぼろぼろになったから、作り直したと気合を入れていた」

「・・・・・・・・」

知っている。

自分のを作り直すついでに何故か少女もセットで作り直すことになったからだ。

「シェーラが華美なことを好まないは知っているけれど、滅多に無い機会だからね」

どうやら王子に王女を止める気は皆無であるらしい。

ふと少女は再びテラスに視線を向けた。

火の玉がこちらに向かって飛んでいた。

反射的に少女の腰が少し浮く。

だが火の玉はテラスに届く前に透明な障壁のようなものに当たり、消えうせた。

「シェーラ、部屋を移動しよう」

王子は少しばかり厳しい表情を浮かべていたものの、特に慌てる様子も無い。

「・・・・・・・・」

「何かと物騒でいけない。・・・お前には心穏やかに過ごして欲しいのに」

「・・・・・・・・」

「姫様っ！殿下っ！！」

アニーの慌てた様子から先ほどの事態が日常茶飯事では無いことを知らせる。

「殿下がっ！」

「・・・私ならここに居るが?」

「違いますっ! その殿下ではなくっ!・・・ああ、もうっ!」

何やら取り乱していたアニーは大きく息を吐き出すと、頭を下げた。

「・・・王弟殿下です」

「叔父上が何か?」

アニーは少女を憚るように口を閉じる。

「構わない」

「・・・拳兵された、とのことす」

「拳兵?どこに?」

「自領にて・・・現在王都に向かって進軍中であると」

「・・・なるほど」

王子は目を閉じて頷くと、少女に微笑んだ。

「心配しなくて良い。すぐに片付けてしまうから」

その笑顔に背筋が冷えた。

肉親が反旗を翻したというのに動揺も無い。

「なかなか平穩にという訳にはいかないようだ。アニー、暫く留守にするからシェーラのことを頼む」

「畏まりました」

「シェーラ。お土産は何が良い?」

「・・・」

「叔父上の土地は良い宝石がとれる。シェーラにはサファイアが良いかな。それで髪飾りを作らせよう」

肉親との戦いの場に出向くというにはあまりにも場違いな言葉だった。

そして王子は国軍五千を率いて出陣した。

国軍5千と反乱軍7千。

反乱軍には王弟の私兵以外に彼に与する貴族の私兵が加わっていた。

「・・・数的には不利ですね」

斥候から齎された情報を元に王子の天幕には国軍を率いる主要なメンバーが揃っていた。

王子と副官、国軍三軍と四軍の将とその副官である。

「予想していたことだ」

卓を真ん中に全ての人間が立っている。緊急時にすぐに動けるように。

「そうは仰いますがな、殿下。数的不利は甘く見てはなりませんぞ」

「フィアース將軍。甘く見ているのでは無く、私は皆の力を信じているのだ」

今回率いる三軍と四軍は実力が3番目、4番目という訳ではない。国軍はその数字によって役割が違っただけで実力は同じだ。劣る者は入ることさえ出来ない。

「人を乗せるのが相変わらず上手いですなあ」

「スインドラ將軍。国随一の魔術の使い手である貴方には大いに期待している」

「仰せのままに」

魔術部隊である第四軍を率いる將軍は恭しく王子に頭を下げた。

「しかしけしからんっ！反乱軍に味方する者がおろうとはっ！」

「腐っても王弟殿下ってことだろう」

激昂するフィアース將軍をスインドラ將軍がどうとうと宥める。
質実剛健、曲がったことが大嫌いなフィアース將軍の大柄な体は怒ると一回り大きく見える。

「そう。叔父上は決して愚か者では無い。全く勝機が無い状況で剣を抜くほどな。ゆえに皆にも苦戦するだろうことは覚悟して貰いたい」

「仰られるまでもなく全力で相手を致しましょう」

「遠慮なく全魔力叩きこんでやりますよ」

王子は二將軍の言葉に微笑んだ。

「頼もしい。二將軍が揃えば私は安心して後ろに控えていられる」

「何の我らこそ殿下が控えて下さるからこそ何も背後の憂いなく戦うことができますぞ」

「そうそう。結局『勝てない』なんて一言も仰らないんですからね」

これから戦に臨むというには明るい雰囲気だった。

「それでは三軍はこれより陣形を整えますゆえ失礼致します」

「よろしく頼む」

「畏まりました」

胸に手をあて頭を下げるとフィアース將軍は颯爽と出て行った。

残ったスインドラ將軍は副官たちを下がらせ、王子と二人きりとなった。

「殿下。王弟殿下の反逆、何かおかしくありませんか？」

「というと？」

「はつきりした根拠つてのは無いんですが、何かね・・・まあ魔術師の勘つてやつですか」

魔術師といっても国軍に所属する者はある程度の剣の腕も求められる。そのせいかスインドラ將軍も一般に想像する魔術師というよりは剣士に近く、体格も王子に劣らない。剣士と違うのは魔術師の常で赤髪を伸ばしていることか。

「勘か。・・・私もそう思う」

「お、そうですか」

「勝機は低いうえ、叔父上に利はほとんど無い。だが向かってくるものに迷っている暇は無い。・・・注意は怠らぬ」

「ですなあ。少々不気味ですよ」

「気をつけることだ」

「御意」

そしてスインドラ將軍も天幕を出て行った。

「・・・様、姫様っ」

少女の目の前でアニーが呼びかけていた。

「このようなところでお休みになつては御体に悪うございますよ」

少女はこくりと頷きソファから立ち上がった。

アニーの言葉のように少女は眠っていたわけでは無い。遠く意識を飛ばして戦場の様子を伺っていた。

国軍も王弟軍も一触即発。

数的にも地の利もあるのは王弟の側。だが精鋭を揃え勇者を擁する国軍の強さはそれを凌駕する。

少女はバルコニーに出ると戦場の方角へ視線を向けた。

「兄上様がご心配ですか？」

アニーの問いかけに首を振った。

「まあ。姫様は兄上様を信頼なさっているのですね。そうですね。殿下はかの魔王さえ倒された当代随一の騎士なのですから」

少女の小さな手がぎゅっと握り締められた。

『サラ』

『だからっ！沙耶だつて！！さ・や！』

『だから。サラであろう？』

『・・・リンのバーカっ！！』

「お前が魔を呼ぶ姫か？」

呼びかけに視線を下ろせば一人の男が立っていた。

近しい者しか近づけないはずの離宮で、男は見慣れた兵士の格好ですらない。

少女は特に何の反応もかえさず男を見下ろしていたが、階下の手すりに手をかけるとそのまま垂直に飛び上がった。

そして少女の目の前に居た。

かなりの高所を脚力だけで飛び上がるとは、尋常ではない。

「見事な魔の色だな」

頭をつかまれまじまじと目を覗き込まれる。

ゆえに男の真っ赤な瞳もよく見えた。

「姫様っ！！・・・誰ぞっ！！曲者がっ！！」

アニーが叫び、静かな離宮が一瞬のうちに喧騒に包まれる。

「痴れ者がっ！」

短刀をかざしてアニーが突っ込んでくる。

「勇猛だな、侍女殿」

男は容易くアニーの手首を掴み、短刀を奪う。

「くっ・・・姫様っ！お早くっお逃げ下さいっ！！」
「その必要は無い」

「失礼しますっ！！曲者とはっ・・・！？」

離宮の警護に当たっていた兵士たちが部屋に突入してくる。

そこで手首を男に拘束された侍女と、無表情で佇む少女を視界に入れる。

「早くっ！この者を取り押さえなさいっ！！」

「え、いや・・・」

アニーの叫びに何故か兵士たちは戸惑うような視線を向ける。

「何をしているのですっ！！」

「だからその必要は無いと言っているだろう、侍女殿」

「・・・」

アニーは叫ぶのをやめ、男を見上げる。

「・・・何者です？」

「申し遅れたが、殿下よりこの離宮の警護を命じられた第六軍が将ラスカーだ」

「・・・将、軍・・・？」

呆然と呟くアニーに頷くとラスカーと名乗った男は拘束していた腕を解き、少女の前に膝をついた。

「初めてお目にかかります、姫君。これより御身をお守りする者、見知り置き下さい」

やはり無反応な少女に構うことなくラスカーは小さな手をとると甲に口づけた。

今日も今日とて離宮の一室からアニーの怒声が響いていた。

「ラスカー將軍！いい加減にして下さいませっ！！」

当の將軍は少女の目の前でのんびりとお茶を飲んでいる。

離宮の警護を王子に命じられたという將軍は少女の前に現れて以来、特に仕事らしい仕事もせず昼過ぎ頃に現れてはのんびりと過ごして帰っていくを繰り返していた。

最初こそ我慢していたアニーだったがついに堪忍袋の緒が切れたらしい。

「貴方の職務はいったい何なのですか！？」

「それは無論、この離宮の警護。つまり姫君をお守りすることと心得ておりますが？」

「貴方の警護というのは姫様のもとを訪れ茶を飲むことですか！？」

「・・・ふむ。まあそれも警護の一環でしょう」

激昂するアニーと対照的にラスカー將軍は飄々としている。

それがまた怒りを煽る原因なのだ。

「姫君は退屈では無いかい？一日中どこに行くでもなし、この離宮で過ごして・・・まるで籠の鳥」

「・・・姫様はっ！！」

少女は静かに外へと視線をやった。

戦場から離れたこの離宮ではその喧騒も血の匂いも流れては来ない。

今どのような状況になっているのか・・・この將軍が毎日訪れるせいで確認が出来ない。

「イルシオン殿下がご心配ですか？」

問われ、少女は首を振る。

「姫君は兄上様を信じていらっしやいますから！」

「魔王を倒した勇者殿下ですからね。国一・・・否、世界一と言っても良い強さでしょうな。確かに心配などされずともすぐに戻って参られるでしょう。では、どうです姫君。庭の散策でもいたしませんか？」

「外は・・・っ」

少女は頷いた。

「姫様っ!？」

ラスカー將軍は微笑を浮かべると手を差し出した。

「それでは姫君。御手をどうぞ」

ちらりと差し出された手を見た少女は、その手をとることなく部屋
の入口へ向かった。

ラスカー將軍は苦笑を浮かべてその後続く。

アニーも負けてなるものと早足で少女を追いかける。

少女が庭に出る時には、王子が王女が必ず付き添っていた。

「姫様。日差しがまだ強うございますから帽子を被って下さいませ」

王子に始まり、王女・アニーと非常に少女に過保護である。

「こういう機会でも無ければ、この見事な中庭を見ることなどそうは出来ませんからね」

「不謹慎ですよ、將軍」

子供を嗜めるようにアニーが眉を顰めた。

戦場には雨が降っていた。

初戦をフィアース將軍率いる4千の兵で打ち破った国軍は、籠城した王弟派を囲んでいた。

籠城戦といえば長期戦となるのは必至。

「・・・面倒だな」

「はあ。そう仰る気持ちもわからんでは無いですがなあ」

「しかし相手は長期戦を覚悟しておりましょう。正面から攻めてもなかなか難しいかと」

スインドラ將軍ばかりかフィアース將軍も如何ともし難いという意見だった。

「叔父上の軍に魔術師はどれほど居た？」

「温存でもしておれば別でしょうが、10分の1もおりませんでしょう」

魔術の素養を持つ者は珍しくは無いが、それが戦闘できる域にまで高められる者は稀だ。

王子はそれを聞き、頷いた。

「スインドラ將軍。私が城門を破壊する。そこへありったけの攻撃魔術を放って欲しい」

「・・・力技ですなあ」

城には大抵魔術によって結界が張られている。ちょっとした攻撃魔術ならば無効に出来るような。

それを王子は破壊すると言っているのだ。

「無理だと思うかい？」

「いや、出来るんでしょう？」

圧倒的な火力を誇る魔術師軍団を率いるスィンドラ將軍にさえ王子の魔力の上限がどこにあるのかわからない。

「問題ない。フィアース將軍には私たちのカバ―を頼みたい」

「畏まりました」

「叔父上の身柄は必ず確保するように」

「はっ」

何故、今この時に反逆するような行動に出たのか。

行動するのならば王子が魔王討伐に赴いていた時こそ絶好の機会だったというのに。

「では、一時間後に」

雨脚は徐々に弱くなりつつあった。

ありえない・・・そんな思いで兵士たちは城壁の名残…もはや瓦礫としか言いような無い場所を見た。

王子が大規模攻撃魔法を使用するということで、兵士たちは一旦退いた。

その様子に王弟軍は警戒しながら追撃はかけてこない。

「殿下。第三軍撤退完了いたしました」

「わかった」

王子は頷くと、腰の剣を抜き前方の城に向けた。

勇者の剣はビリビリと帯電し、周囲に誰も近づけない。

その剣を王子はいつそ無造作にも思える動作で城門へ向けて振った。

その直後凄まじい雷鳴と爆発と、雨上がりの薄暗さを吹き飛ばすような鮮烈な光が辺りを覆った。

誰もが反射的に目と耳を覆う。

魔力の余波が肌を撫ぜ、総毛だつ。

光が収まり、目を開けたその光景に味方の兵士たちさえ言葉を失ったのだ。

「殿下。聊かやり過ぎじゃないですかね？」

「そうか？」

スインドラ将軍が口元を引き攣らせながら王子を伺う。

「あの状態では、追撃の魔法なんて必要無いでしょう」
城門といわず、城の半分が決れている。

居たはずの敵兵士の姿も無い・・・今ので吹き飛ばされたか、消し去られたか。

「そうだな。フィアース将軍」

「はっ」

「兵を率いて叔父上の身柄を押さえよ。抵抗する者も少ないだろう」
「畏まりました」

今の攻撃を見て更に抵抗する人間は愚か者が自殺志願者だ。

「王弟殿下、巻き込まれて無いといいですなあ・・・」
少しばかり哀れみをこめてスインドラ将軍が呟いた。

どうやら王子が戻ってきたらしい。

離宮は相変わらず静けさに包まれているが、流れてくる空気が騒がしい。

「私も本日でお役御免です、姫様。楽しかったので、残念ですね」
「……」

離宮に来て、茶を飲んで、一人話して、時折アニーの一喝を受けながら。

給料泥棒と言われても無理の無い生活をラスカー將軍は送っていた。

「惜しむらくは姫様の笑顔を賜れなかったことですね。お笑いになると大層お可愛いでしょうに。もちろん、今のままでも十分に愛らしいですよ」

浮ついた物言いはそれが本気か社交辞令なのかすぐには判断できない。
「疑っていらつしやいますね？」

「……」

無言の少女の前にラスカー將軍は膝をついた。

そうすると身長差があるために丁度ラスカー將軍の赤い目と合わせる位置となる。

初対面の時を彷彿とさせる立ち位置だ。

「姫君。貴方さえ私の手を取って下さるのならば、喜んで私はその身を捧げましょう」

ラスカー將軍は笑みを消し、真剣な表情で少女を見つめた。

王族でも無い、確かな身元も後ろ盾さえない少女に何故そこまで下手に出るのか。

何が狙いなのか。

「その憂いに満ちた瞳。……その中に隠された闇は誰に向けられているのですか？」

少女は緩慢な動作で取られていた手を払おうとした。
しかしラスカー將軍は放さなかった。

「教えていただけませんか？」

少女は小さく息をつく、座っていた椅子から立ち上がり部屋の外の廊下へと続く扉へと向かった。

そして扉の前に立つと、何をするのかと見つめていた將軍を振り返り扉を開けた。

「・・・酷い方だ」

出て行けという少女の無言の言葉を正しく理解した將軍は立ち上がった。

群青色の、黒に近い濃い色の髪を持つ男は貧乏貴族の出で、実力でここまでのし上がってきた。

柔らかな物腰で貴族の令嬢には人気が高いという。
だが。

初対面のときに見せた男の姿こそが真実。

取り込んで上手く使うという手もあっただろう。

しかし確実性を狙うのならば、不確定要素は少なければ少ないほうが良い。

優しさなど。慰めなど。・・・憩いなど。

不要なのだ。

「闇の姫。殿下には気をつける」

去って行くラスカー將軍が、入れ替わるように歩いてくる王子に頭を下げて立ち止まる。

王子は何か二言三言告げると小さく頷きラスカー將軍は今度こそ

少女の視界から消えた。

そして、王子が少女の姿を見て笑みを浮かべる。

「ただいま、シェーラ」

転章

その日、魔界は朝から妙に騒々しかった。

「勇者一行が・・・」

「ああ、またか。人間も懲りないな」

すれ違う魔族がそんな会話を交わしていた。

どうやら世のセオリー通り魔王が居れば勇者も居て、当然ながら魔王討伐にやって来るらしい。

・・・しかし討伐する必要なんであるのだろうか？

そりゃあ人間苦しめるとか、魔王が居るから魔物が跋扈しているとかなうならわかるけど・・・

「特に何もしてないよね？」

「何だ？」

問いかけると魔王が首をかしげた。魔王は「まおう」さんという名前ではなく役職でした。

初めこそびびったが、魔王は特に何をすることもなく異世界迷子である自分をここに置いてくれた。

『出て行くなり、元の世界に戻るなり好きにしろ』と。

うん、それが好きにできるならこんなところに居ないと思うよ。それ以来元に戻る方法を探しながら魔界で過ごしているわけ。

そして魔王は無愛想ではあったが、付き合いは良かった。

勇者がやって来るというのに、こうして付き合い合ってくれてるし。「ほら、勇者さん？が来るんでしょ」

「・・・ああ」

それだけかい。

「子どもが気にすることでは無い。むしろお前は人間なのだから丁度良いのでは無いか？」

「わたしのことじゃなくて、だって濡れ衣でしょ？」

身長が低いので、執務机の上に首だけ出して魔王に言う。

「難しい言葉を知っている」

「・・・どこまで子ども扱いだ。」

「仕方あるまい。人は魔という存在そのものに嫌悪感を抱くように造られた。弱き己の身を守るためにな。謂わば生存本能と言い換えても良い」

「へえ・・・」

そう言われると仕方ない、のかな。

「でもそれならなおさら、魔族に手を出したりしないんじゃない？」

「人も一律ではない。弱いからこそ恐怖を抱く。ならばその対象を消してしまえば良い」

随分と身勝手な言い分だ。

「そういうの・・・嫌い」

魔王が苦笑した。

無愛想だけど、魔王はとつても・・・

「人が生まれし時からさだめの宿命。神の悪戯は悪辣だ」

「神様嫌い」

宥めるように魔王の手が頭を撫でた。

「一種のイベントだと思えば良い。これが済めば当分勇者とやらも現れぬだろう・・・確か前に来たのが300年ほど前であったか」
「ちなみに魔王、貴方何歳ですか？」

そう、愚かな私は魔王の言葉を信じた。

穏やかな日々が戻ってきた。

「シェーラ。お土産だよ」

反乱軍討伐から戻ってきた王子は少女の元に土産を持参した。
渡された小箱をシェーラはちらりと見る。

「開けてごらん」

そう言われ、少女は箱を開ける。中には緑の石がついた髪飾りが入っていた。

「シェーラの黒髪に映えると思って、つい手にしてしまったよ」

つけてあげよう、と王子はその髪飾りを少女の髪にそっと挿した。

「ああ、いいね。似合うよ」

「・・・お兄様。私には無いのかしら？」

少女の隣に座っていた王女が訴える。

「もちろん。お前にもあるよ・・・だが髪飾りより実用性のあるものが良いだろう？」

きらりと王女の目が輝いた。

「お兄様！」

「ああ、先日の魔族との戦いで剣が駄目になっただろう？部屋に届けさせたから後で確認するといい」

「ありがとうっ お兄様！」

抱きつかんばかりに王女は喜んだ。

「延期になっていた成人の儀も一月後と決まったことだし、もう少

し淑女らしくして貰いたいと皆思っているのだけねえ」

「あら、それはお姉さまにお任せしていますもの。私はドレスや扇より剣を持つほうが性に合っているのですわ」

男女問わず文武両道のお国柄。王女の有様に眉を潜める者も少数だ。

「シェーラも勇ましい私が好きよね？」

少女は少し間を開けた後、首を縦に振った。

「・・・嫁の貰い手が心配だ」

「あら、私よりお兄様のほうが先ですわ」

そこで悪戯っぽい笑みを王子に向けた。

「シャディルアよりお見合いの話が舞い込んでいること存じ上げておりましたよ」

「・・・どこで聞きつけてくるのだから」

「ふふ、ついにお兄様もご結婚ですかしら。シャディルアのサピエンサ王女は聡明な方で諸国に名を知らしめていらっしゃる方。お会いするのが楽しみです・・・ああ、どうぞご心配ならなide、お兄様。シェーラのことは私がしっかりとサポート致しますわ」

ねえーと少女に同意を求めてくる。

「そう先走らないでくれ。サピエンサ王女は確かにいらっしゃることになっているが、外交でいらっしゃるのだから」

「そういうことにしておいてさしあげますわ。シェーラはシャディルアという国を知っています？」

少女は首を振った。

「シャディルアは優秀な癒し手を多く輩出しているの。その中でもサピエンサ王女は特に力の強さで有名で、少し大げさだと思うけれど死人しうじんさえも生き返らせると言われているわ」

その言葉に少女の肩がぴくりと揺れた。

「さすがに本当に死人を生き返らせることは出来ないだろうけれどもね。シェーラも王女に興味があるかい？」

少女はじつと王子を見つめた。

王女は外交で来訪するという。通所そんな相手に少女は顔をあわせない。

「そうね、未来のお義姉様におなりになるかもしれないですし」

「ユーリア・・・」

ふふふ、と王女が笑う。

「きつとアルカーナの王女よりずっと素敵な方よ。だから安心してどうやらリリアーナ王女を仇敵認定したらしい。」

「リリアーナ王女と意気投合していたように見えたけれど？」

「冗談ではありませんわっ！あのように口先だけの方と一緒にしないで下さいませ！」

憤懣やるかたないと腰に手を当てる王女に王子は苦笑した。

少女は思う。

死人さえも生き返らせる・・・それはどんな奇跡だろうか、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2888w/>

ジハード

2011年10月10日03時23分発行